



自動車や情報機器のリサイクルを手掛けるエコブリッジの本社工場

● エコブリッジ(八戸)①



■ 金曜日企画 ■

環境に優しい循環型の社会や経済を構築するためのキーワードである「3R」。いずれも英語で頭文字がRのリデュース(廃棄物削減)、リユース(再利用)、リサイクル(再資源化)の三つを指し、工業界でもその考え方を重視した取り組みが広がっている。

八戸市川町の水産加工団地内に本社工場を構えるエコブリッジは、自動車や電子情報機器のリサイクル事業を手掛ける。使用済み自動車を解体して各種部品を再資源化し、国内外に販売するのが主力ビジネス。一度役目を終えたモノを、壊し、新たな価値を生み出すモノづくり企業だ。

中里明光社長(59)は「丁寧に分解、解体することで品質基準をクリアした部品を取り出し、再び利用することができ

自動車リサイクル、部品輸出

電子機器にも事業拡大

る。産業廃棄物の減量や適正処理にもつながる」と強調する。

2002年10月、自動車販売整備業を営んでいた中里社長が、新たな事業分野に参入する形でエコブリッジを設立。1990年代以降、廃車の破砕くずなどが大量に投げ捨てられた事件を契機に産業廃棄物の不法投棄が社会問題化し、その後の自動車リサイクル法の制定につながるなど、環境保護に対する重要性が高まっていた時代だった。

多種多様なパーツで形成される自動車は、適正に処理すれば再生可能な素材が多いリサイクルの宝庫だ。同社は廃車からエンジン、タイヤ、ドア、ボンネット、バンパー、ハーネスなどを取り出し、再利用可能な部品を中古車販売業者や自動車整備工場に販売する。



エコブリッジ 本社・工場は八戸市川町下場45の10。2002年設立の株式会社。中里明光社長。従業員数25人。グループ会社として、障害者就労継続支援A型事業を手掛ける「ライプワークス」を運営する。



リサイクル事業の重要性について語る中里明光社長

創業から約3年後には海外展開にも着手。八戸港などを活用したコンテナ貨物輸送により、リサイクル部品をロシアやジョージア、ドバイ、東南アジア方面へ輸出している。現在、売り上げでは国内と海外の割合は半々だが、徐々に輸出のシェアが伸びている。

6年ほど前からは、使用済みのパソコンや複写機などの電子情報機器の分解事業もスタートした。各種機器から電子基板などを回収し、製錬会社に販売。電子基板には金、銀、銅といった非鉄の希少金属(レアメタル)が含まれており、製錬会社が抽出して再利用するのが一連の流れだ。

データが保存されたパソコンなどは、情報漏えいがないように管理面を徹底。情報セキュリティマネジメントシステム「ISO27001」の認証などを取得しており、ハードディスクの処理は適正に施す。希少金属を取り出すリサイクル事業は、いわゆる「都市鉱山」のビジネスとして注目度が高まっている。

業容拡大に伴い、17年には本社工場を現在地(旧第2工場)に移転し、拠点の集約化と作業効率の向上を図った。グループ会社である障害者就労継続支援A型事業所「ライプワークス」と連携して施設利用者をエコブリッジに受け入れ、リサイクル事業を通じた障害者の自立を支援している。

中里社長は「環境に優しいリサイクルの仕事は、今後ますます重要になるだろう。資源を有効活用できるよう、人材育成や技術力の向上を進め、地域経済に貢献したい」と意欲を示す。

(松原一茂)